

# ジャマルッディーン・アフガーニーの政治思想と彼を取り巻く諸言説

平成 18 年度入学  
派遣先国：エジプト、イラン  
平野 淳一

キーワード：アフガーニー、史資料、書店、インタビュー、研究教育機関

## 対象とする問題の概要

本研究は、ジャマルッディーン・アフガーニーの政治思想及び彼を取り巻く諸言説に焦点を当て、現代のイスラーム世界におけるその影響を検証するものである。

彼は、19 世紀後半のエジプトやイラン、アフガニスタンといった諸国で反西洋帝国主義運動を扇動した国際的革命家と位置づけられ、その政治思想は今日のイスラーム世界になお壮大な影響を刻印し続けている。現代イスラーム世界の知識人とりわけてイスラーム復興論者は必ずといってよいほど彼の議論を参照し、対西洋近代との関係からイスラーム復興の可能性を呻吟している。その意味で、彼はイスラーム世界の現代的課題であるイスラーム復興を思想的に議論するにあたって決して欠かすことのできない重要な存在であり、19 世紀の人間とはいえ優れて今日的アクチュアリティを備えた人物なのである。そのような彼を、しかしながら、日本また欧米のイスラーム研究はこの 30 年に亘り等閑に付し続けてきた。

## 研究目的

本研究は、今日のイスラーム復興の思想的理解の一助を提供するため、第一に彼の政治思想の解析を試み、第二に後代の彼をめぐる諸言説を分析して、彼を基点とするイスラーム政治思想の系譜的概観を試みる。とりわけて後者を重視し、近年のエジプトを中心とするアラブ世界、イラン、アフガニスタンにおけるアフガーニー研究を押さえ、そこにみられる特徴を指摘することで現在のイスラーム世界の置かれている知的状況を総合的に考察する。研究方法としては、アラビア語及びペルシア語一次資料に依拠した原典分析、現在のイスラーム世界におけるアフガーニー研究者の聞き取り調査を目的とするフィールドワーク、イスラーム学と社会科学に依拠した理論研究とその構築が挙げられる。



[イスラームを象徴するモスク 於コム, イラン]

### フィールドワークから得られた知見

本調査では、おおそよ一ヶ月の期間にわたり、エジプトのカイロおよびイランのテヘランを中心にフィールドワークを実施した。その概要は、以下の二点にまとめられる。第一に、現地の書店や図書館を訪問し、関連史資料の購入・複写・撮影をおこなったこと。とりわけてカイロ滞在中には国際ブックフェアが開催され、そこで大量のアラビア語文献を入手することができた。

第二に、現地の研究教育機関の研究者へインタビューを実施し、知的交流を図ったこと。エジプトではカイロ大学やアズハル大学等を、イランではイスラーム諸学派接近アカデミーおよび同機関付属大学を訪問し、当局研究者へのインタビューや大学生、大学院生との交流を果たした。

以上の二点の概要から、両者に共通する以下の二点の知見を得ることができた。第一に、現地における人脈構築の重要性。地域研究を志すものにとっては、現地の情報を直接に所持する特定の現地人と信頼関係を形成・発展させておくことほど、実際のフィールドワークにおいて心強いものはないであろう。本調査の過程で特定の書店や図書館、研究機関へ足繁く通いつめたことは、店主や図書館関係者、現地研究者らとの間に関係の構築とその深化をもたらし、今後のフィールドワークに向けての橋頭堡となった。

第二に、第一と関連するが、現地語の習得の重要性である。確かにこのグローバルな時代、英語一つで地球を旅することができるといっても過言ではない。実際に報告者も、カイロで英語さえできればエジプトを十分堪能できると自負する旅行者に遭遇した。しかし、地域研究者は旅行者ではないし、あってはならない。その地域の動態する現実に貫通する内的な構造を最深部から掬い上げて明らかにすること、それが地域研究に課せられた、あるいは自ら課した根源的な責務であるはずである。地域の論理をより直接反映する現地語を疎かにすることは許されない。そのことを、改めて痛感した。



[イスラーム革命を標榜する看板 於テヘラン，イラン]

### 今後の展開・反省点

本調査はエジプトを中心に計画を立てたこともあり、相対的にイランの滞在日数が短く十分なペルシア語史資料の収集は困難であった。したがって、イラン側の史資料の収集を重点的に、可能であればさらにアフガニスタン側の史資料の調査もおこなうことが今後のフィールドワークの主目的となる。

反省点としては、第一に基礎経費の概算把握の必要、第二に現地の研究協力者への過剰依存が挙げられる。エジプトから日本へ文献を発送しようとしたとき、予想以上の金額が必要となり途方に暮れてしまった。文献輸送費など予測可能な基本的事項およびその概算を、出来る限り早期に把握しておく必要性を痛感した次第である。

また、研究協力者へ必要以上に負担をかけてしまった。例えば、図書館などにおける史資料の参照手続きを、時間の短縮という単純な功利的理由からほとんど任せてしまったことは、将来にわたる自立的な研究姿勢を損なうものであったと悔恨の念を抱く。



[カイロの夜景 於カイロ，エジプト]